

ナチスドイツの脅威に晒されながら書かれた本書（原書）には、著者の祈りにも似た切実な思いが込められている。「ドストエフスキーは黙示録の光に照らして歴史を見ていた。そして未曾有の世界的破局を予言している〈…〉彼は、われわれの時代の、破滅的な世紀の人間だったのだ」（718 頁）という「むすび」の言葉がそのことを端的に物語っている。読者は、著者と同じ宗教的世界観を共有できるかどうかは別として、筆致に滲む切実な思いに本書（原書）の重みと生命力を感じ得ずにはいないであろう。

本書は、原書には明示されていない引用の出典までが補足され、とても親切な翻訳に仕上がっている。ただ、原書の「付録」（創作ノートから抜粋された6つのプランとその解説）は削除され、代わりに原書にはない「略年譜」がつけられているのは、諸事情に鑑みた適当な処置だと認めるにしても、唯一残念に思わざるを得ないのは、原書のゴチックが本書には生かされていないことである。

いずれにせよ古典的名著が一般の読者にも容易に読むことができるようになったのは大いに喜ばしいことであり、またそれが「評伝」であることは、「バフチン」なる呪文に席卷された趣のあるドストエフスキー理解に対し、発展的な意味での一服の清涼剤ともなってくれるのではなかろうか。

（すずき じゅんいち・札幌大学）

ジェームス・H・ビリントン著
『^{アイコン}聖像画と手斧 ロシア文化史試論』
藤野幸雄訳

勉誠出版，2000 年，xxvii+xvii+896 頁

栗生沢 猛 夫

原書は1966年に出版された。本文が597頁、それに文献表27頁、いわゆる注が160頁、索引33頁、その他図版22枚とその解説文がついている。大作というばかりではなく、ロシア文化史を解釈してみるという試みとその内容の面でも注目すべき書物である。原著出版後35年を経て書評を、というのもしささか新鮮味に欠けるが、この度「邦訳」がなされたので、改めてということであろう。

著者は本書でロシア文化史についての何らかの百科事典的な記述、あるいはその理解のための鍵を提供しようと意図しているわけではない。これは著者の個人的探求と選択的記述の産物で、新たなロシア文化理解の可能性を探ろうとする一つの試みにほかならない。

本書は六部からなる。最初の「背景」はロシア文化の起源としてのキエフ・ルーシと「森」の意味を探る。ロシア史の物質的側面と精神世界を象徴するものとしての斧とアイコンについての説明がなされる。続く「遭遇」の部では、モスクワ・ルーシの思想大系を検討したのち、モスクワと西洋との遭遇の問題が扱われる。第3部「教会分裂の世紀」では、まずニコンの改革を契機とする教会分裂について、ついでアレクセイ帝期以降の西洋文化への傾斜について論じられる。ピョートルをもって転換期とするのではなく、むしろ18世紀中葉が転換の時期であることが示される。第4部「貴族文化の世紀」では、19世紀中葉までが扱われ、啓蒙思想と反啓蒙思想の対立、そしてロシアの思想家を悩ました「呪われた諸問題」について記される。第5部「新たな岸へむかって」は19世紀後半の状況が扱われる。大改革から革命に至る時代にふさわしく、社会思想、ナロードニキ運動、世紀末からの自由主義、弁証法的唯物論、さらには神秘主義的観念論などについて論じられる。最終部「不安定な巨像」は社会主義革命直前の状況（「1. クレッシェンド」）、ついでソヴィエト時代、とりわけスターリン期の意味が論じられ、「4. ロシア史の皮肉」で全体が締めくくられている。

本書の特徴の一つはロシア文化史における宗教性の強調である。著者は明らかに斧よりはアイコンに関心を抱いている。たとえば著者はイヴァン雷帝を単に貴族

を犠牲に集権的近代国家を築いた人物とはみていない。むしろイヴァンは保守的モスクワ人で、正教の保護者たらんとしていたとする。ときに西欧諸国の身分制議会と比較されることもある全 国 会 議^{ゼームスキー・ソボル}も、宗教的な性格をもっていたものと捉えている。ロシア国家の宗教的性格は教会分裂後、勝利したかにみえた教権主義者のニコンとともに排除されることによって、薄められる方向性をたどるが、それは少なくとも狂信性という形でその後も引き継がれる。著者にとってレーニン^{レーニン}は現代のアヴァクームを思わせる存在である。

著者の博識と比喩を交えた巧みな文章には驚かされる。かれは思想、哲学、文学を論じつつ、音楽、建築、とりわけ絵画について蘊蓄を傾ける。歴史を通じての鐘と大砲の意味、モスクワとソヴィエトに於ける異端と異論派、近代におけるスウェーデン、フランス、ドイツからの影響について論じたかと思えば、フィロフェイ、ドストエフスキー、ムソルグスキー、マレーヴィチの苦闘を分析する。味わい深く、読む者の想像力と知的好奇心を喚起するすぐれた思索の書といえることができる。

疑問点もないわけではない。ロシア史における斧の象徴的意味を力説しながら、最後にトロツキーの命を奪った「ピッケル」について意味あり気に記すとき、読む側は著者の真意をはかりかねてしばし考え込む。第三ローマと第三インターの間になんらかの関連があるかのような記述にであうとき、途方にくれる。また16世紀の異端審問とスターリン時代の反対派にたいする見せしめの裁判を直接的に結びつけることも、スタハーノフを鞭身派と、党アパラチキを旧教徒古儀式派（分離派）とみて、スターリン期を「モスクワ・ルーシの復讐」の時代と特徴づけるのも、興味深い、説得的であるかどうかは別問題である。ロシア文化史をキエフ・モスクワ・ペテルブルグの流れの上でみることもやや平板で、大ロシア中心主義的とのそしりを免れまい。西洋との関連に重点を置く立場は成功していると見ることができるし、それなりに理解もできる。しかしロシア史における「東」の問題がおろそかにされたというきらいは残る。全体として、本書は、いわゆる「ロシア的精神」とか「ロシアの魂」を強調することで終わる、陳腐な見方に陥っていないことは確かであるが、そうした見方に陥ることを防ぐための意識的な装置づくりは行われていない、といえるかもしれない。

最後に「邦訳」について一言。これは「訳」とはいえない。誤訳、不適切な訳語、脱漏が多すぎて、評者は言うべき言葉を見いだせないでいる。本文にとりか

かってすぐに、次のような文章にでくわす読者は、理解困難に陥るか、少なくとも原著の主張を誤って理解するであろう。

「事実、こうした作品『ローランの歌』及び『ニーベルンゲンの歌』——栗生沢』に示される中世紀西欧の高度な文化にしてからが、東ヨーロッパの文明度の低い草原種族からの侵略というショックを吸収する戦いでの勝利は、強いキリスト教文明あってこそはじめて可能であったと言えよう」(4頁)

正しくは以下になる。

「実際、これらの作品が表わしている中世盛期の西欧の文化的成果は、東ヨーロッパにおける一つの戦闘的キリスト教文明〔ロシアのこと〕の存在なしには不可能であつただろう。〔ロシアは〕文明度の劣るステップ諸民族の侵入の衝撃の相当部分を〔西欧のために〕受けとめ和らげたのである」

このような例が次々と続けば、読者はこの「翻訳」を信頼することはできず、原書なしには読み進むことができなくなる。

不適切な訳語の例を、「邦訳」の冒頭部分に限ってその一部のみをあげれば、「キリルとメトディオスの末裔たち」(5頁)→「キリルとメフォージの弟子たち」,「全世界キリスト教徒審議会」(6頁)→「世界教会会議〔ないし全地公会〕」,「司祭」(7頁)→「司教」,「大主教」(同)→「府主教」,「曲がった字体」(9頁)→「草書体」,「歴史にたいする異常ともいえる感覚」(同)→「並外れた歴史感覚」,「司祭、予言者、使徒は、創設期以来、途絶えることなく顕在化される方向をたどり、最後の審判にいたるまで続く」(同)→「〔天地〕創造から〔キリストの〕受肉、そして最後の審判にいたるまで続く族長、預言者、そして使徒たちの途切れることなき連続性」。

宗教を主要なテーマとする本書の「訳」者は、修道士と司祭を区別することもない。いわゆる分離派について、根本主義者とすべきところを「正統派」としたり、ドゥホボールを「聖霊否定派」とする。だがこのような例を続けるのは無益であろう。「訳」者はこの大著を「翻訳」としようと決意し、それなりの努力はされたのであろうが(膨大な「註」まで丹念に「訳」されているが、ここでも誤りが多い)、それは十分でなかったのみならず、そもそも「訳」者にそのための適格性があつたかどうかを疑わせる結果に、本「訳」書はなっている。本書は読者と、何よりも著者にたいする冒瀆であると思う。

(くりうざわ たけお・北海道大学)